

どーらく 改題 逆説土楽たより

断捨離考

9月号(NO24)通巻 174号

2020年9月10日(木)発行(毎月10日)

【農暦】除草された菜園をとり戻したい！

○コロナ禍の中、豪雨、酷暑、台風と普通でない気候が続いている。今、過去最強クラスの台風10号(=ハイシェン(海神)*1)が九州を北上して被災が心配される。九州は地震、豪雨、台風である。コロナだけでも大変なのに言葉がありません。大過がない事を祈るだけである。それにしても、いろいろあり過ぎる。弱者には耐え難いものがある。

○晴れて草刈りと思うと、熱中症に注意を連呼される。長年の夜型生活の習慣は換え難く、朝は弱い。夕方草刈りを始めると、最近日は短い直ぐ暗くなる。体温か汗に蚊が寄ってくる。詩吟の海南行*2の転句の

“満室の蒼蠅掃えども去り難し”を決まって思い出す。蚊ではなく蠅だが、蚊の羽音との不快感、刺された痒さは、掃えども去り難しである。1分が1時間にも感じられる。早々に退散してしまう。そんなことで、草刈りは極小な時間になり、草に負けている。ずぼらを棚に上げて言えは、背景にコロナ、酷暑、豪雨、それに体力・気力がある。困ったものである。

○困った続きになるが。“あなたのところがきれいだからなんでもきれいに見えるんだなあ みつお”と、7日の日めくり暦(月間)にある。人の悪いところ、嫌いなところなど、醜い嫌なことばかりが見えてしまう。やはりところがきれいではないのかも知れない。きれいに見えるのは、幼な子と清楚な花と緑の自然だけである。相田みつをに、心が濁っていると云われそうである。きれいな人と出会うためには、心の草とりが必要なのかも知れない。7日に会うこの言葉には考えさせられてしまう。

○畑に入れない程草が成長している。家の周り、畑の道筋、畑へ、それからブルーベリーの蔓などの蔓の刈り取りなどの順序で進める。少し進んでも、次は始めからになる。いつもより早いようだが彼岸花も咲始めた。暑さ寒さ彼岸までという。除草された菜園をとり戻したいと思う。(了)

*1 国際機関で決めた台風情報の一元化の国際名称

*2 海南行の作者は細川頼之で足利義満を支えた人

*先月号の補足；横須賀の予科練は霞ヶ浦に移ったが、海軍の通信兵の予科があった。

【楽農】<畑>トマト、茄子、ピーマン、胡瓜を少々収穫。蔓&草刈り。

【楽市】イベントなど；詩吟会長会(29日)共生の会(3日)川柳の会(3日)。



<100万本のバラを連想>私には野の花が。25日撮影



<草刈りするも>蔓がキュウイにも。草の繁茂が。4日撮影

【つぶやき=Tweet】徳富蘆花の「草とり」の朗読を聴いて！

○笠間から移動中の車で、いつも、ラジオをBGM的に聴いている。たまたまNHKで徳富蘆花の「草とり」の朗読をやっていた。“草とり”には関心があったので面白く聴いた。10日程前のことである。一部分だったので全文を読みたくなりネットで探し読んだ。感心した。大正期の人々の草取りについての描写が今畑で起こっている草取りと余りにも酷似しているのに驚いた。明治大正期の徳富蘆花の洞察力は流石である。「不如帰」の著者である。

○草刈りは朝露の乾かぬ間にする。夏草は生長猛烈でも、気をつけるから案外制し易い。恐ろしいのは秋草である。直ぐ実になる。一度落した草の種は中々取り除けられない。と言っている。菜園を始めた時に農家の人から同じことを言われた。そう思っても出来ていない。朝は遅い。生育が早く間に合わない。気が付いたら種がこぼれている。夜型の生活習慣は今でも治らない。

○また、こんな事も言っている。“草を絶やすと地力が無くなる。草をとつて生のまま土に埋める。または乾燥させ、焼いて灰にし、積んで腐らし土の肥料にする。邪魔な草が死んで土の肥料になる。清水には魚は棲めない、草一本もない土は、見た目は良くても、生命なき痩せ土になってしまう。”と。有機農法である。昭和30年代までは、ほとんどの農家は有機農業であったのだ。農薬、農業機械の普及と共に有機農業は限られた人だけのものになっている。

○「不如帰」の女主人公の浪子は“もう女なんぞに生まれたくない”と言いながら死んだ。家族制度の悲劇を扱った小説で当時大評判になった。大正浪漫が消え、昭和ファシズムに進んだ時代である。正岡子規の俳句のホトトギスも同時代である。大逆事件の幸徳秋水らの死刑を阻止するため、兄の蘇峰を通じて首相の桂太郎へ嘆願、さらに明治天皇宛の嘆願書を『朝日新聞』に送ったりしている。こんな時代を暗示させる“心も草だらけである。社会も草だらけである。世界の草の種をとり尽すことは出来ない”と「草とり」の中で書いている。

○ホトトギス（杜鵑・時鳥）の鳴き声を時々聴く。“特許許可局”と聞こえる。何か癒されるような気がする。詩吟で“後夜佛法僧鳥を聞く、空海”があるが、木葉木菟（このはずく）のことで“ブッポーソー”と鳴く。空海に佛法僧鳥の時間もあると思う。無為な時間は意外に多い。「草とり」を読んで考えてしまう。格差、貧困のニュースを見るたびに、利他でない政治家。社会のリーダーばかりが目につく。徳富蘆花ではないが、心の草、社会の草とりが必要なのかも。（了）

○断捨離考：酷者が過ぎない、気力は落ちるでは。少しずつでも継続。

【後記】コロナ対応の生活スタイルへ変換、試行錯誤、儘ならず。【編集せずランダム構成】



<試し撮り>誕生祝いのカメラで。22日撮影

発行者；小暮虎雄

住所；笠間市本戸4201-10

携帯電話；090-9333-4135

HP；kogure農場

メール；torao-k@nifty.com